ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.1

豊後高田の城跡

豊後高田市教育委員会

はじめに　～“兵どもが夢の跡”市内の中世城館～

大分県がおこなった調査によると、大分県内には約５７０ヶ所もの中世城館が確認されています。このうち、豊後高田市内には約３０ヶ所が存在しています。

豊後高田市は国東半島西部、豊前国と豊後国との境界に位置しているため、戦国時代には大友氏（豊後国）と大内氏（豊前国･周防国）の勢力がぶつかる、攻防の最前線でした。また、国東半島は大友氏の一族でありながら、１５８０年（天正８）に反乱を起こす田原氏の影響が大きかった地域で、半ば大友氏に対して独立的な動きもみせていました。

こうした複雑な情勢を背景に、豊後高田市内には多くの城が造られました。国東半島の中央部にそびえる両子山（ふたごさん）を境に、東側には南北朝時代以来の雄渡牟礼（おどむれ）城（国東市）、その西側には屋山城といった中核的な城郭が立地しています。前者は国東田原氏の城郭で、後者はその分流の武蔵田原の一族で、大友氏に近い吉弘氏の城郭です。前述の田原氏が反乱の際に立て籠もったとされる城が、市内佐野の鞍懸（くらかけ）城です。この他にも、寺院や荘園を守るための城、平地に築かれた水堀をめぐらせた城館など……まさに“兵（つわもの）どもが夢の跡”。様々な特徴の城跡を現在でも市内で確認することが出来ます。

今回、市内に残る主な中世城館を取り上げて解説した小冊子『豊後高田の城跡～ぶんごたかだ文化財ライブラリー Vol.1 ～』を作成しました。城跡見学の手引きとして、豊後高田市の歴史文化を知る一助としてご活用いただければ幸いです。

豊後高田市教育委員会

原図は、国土地理院発行２５０００分の１発行地形図を使用。
城館位置は、大分県教育委員会２００３『大分の中世城館』第３集より典拠

豊後高田市内の城跡関連マップ

屋山城　～眺望絶佳！吉弘氏の居城～

屋山城は豊後高田市加礼川にそびえる標高約５４０ｍの屋山（別名：八面山）の頂部に吉弘氏によって築かれたと伝えられる中世山城です。山の中腹には中世に「惣山」として六郷山寺院を統括する地位にあった長安寺の伽藍が広がります。築城時期ははっきりしませんが、吉弘氏が武蔵吉広（国東市）から都甲地域に本拠を移した１６世紀前期と考えられています。吉弘氏は長安寺の主要な役職であった「六郷山別当職」や「執行職」を占有し、六郷山の支配を通して国東半島全体に強い影響力を及ぼしていました。

城の構造は、東北～南西方向にほぼ直線的に伸びる屋山の急峻な尾根に沿って細長く郭（曲輪）が連続する「連郭式山城」です。城の入口付近の長い竪堀や花弁状竪堀、尾根筋を切断して敵の侵入を防ぐ堀切などの遺構が現在でも良好に残っています。これらの仕掛けは、１５７９年（天正７）に城主吉弘統幸によって大改修した時のものと思われます。また、屋山頂上からは周囲に視界を妨げるものがないため、都甲地域はもとより、はるか周防灘まで見渡すことが出来ます。

屋山山頂からの眺望（長岩屋～真玉、周防灘をのぞむ）

■筧城跡伝承地

屋山城主の吉弘氏は、戦のない平時は麓にあった筧城（筧の第）を居城としていたとされています。但し、その正確な場所ははっきりとしません。長安寺境内であったとも、吉弘氏の菩提寺であった金宗院辺りであったなど諸説あります。現・戴星学園付近も伝承地の一つであり、「ホリノウチ（堀の内）」の小地名が残り、城の庭石と伝わる「大岩」が所在する場所を、2014年（平成26）に「筧城跡伝承地」として整備しました。

●曲輪（くるわ）

山の斜面を真っ平に削り、攻め手を待ち構えます。

●主郭（しゅかく）

曲輪の中でも、お城の中心にある区画を指します。本丸ともいいます。

●堀切（ほりきり）

尾根から入ってくる敵に対し、横に堀を切らせて侵入を防ぎます。

●切岸（きりぎし）

斜面を削り傾斜を急にすることで、攻め手が登ってくることを防ぎます。

0　100m

●竪堀（たてぼり）　敵の横移動を防ぐために、登りやすい斜面を縦方向に空堀を設けました。

屋山城縄張り図

縄張り図は、大分県教委2004『大分の中世城館』総論編より一部加筆・修正

佐野鞍懸城　～田原親貫の乱の舞台となった城～

佐野鞍懸城（さ の くらかけじょう）は豊後高田市佐野にあり、地元で「城山」とも「鞍懸山」とも呼ばれる標高１００ｍほどの小山に築かれた城です。河内地区には「鞍懸城」と呼ばれる城跡が奥畑（おくばた）集落の山中にも残っていますが、２つの城がどのような関係にあるのかは分かっていません。南北朝時代に築かれた奥畑鞍懸城（１２頁参照）から、戦国時代になって佐野鞍懸城に新しく移ってきたという考え方や、平時は佐野にあって、戦の際に奥畑に詰めた…など諸説あります。

佐野鞍懸城は国東半島に勢力を誇っていた田原氏の城でした。１５８０年（天正８）に田原氏は主君・大友宗麟に反旗を翻（ひるがえ）し（田原親貫（ちかつら）の乱）、鞍懸城もその主戦場となります。当時の史料によると、２月に城に立て籠もり、１０月に落城したとされ、実に８ヶ月にもわたって激しい戦いが繰り広げられたことが分かります。城跡の頂部から眼下に望む「矢原（やばる）」集落は、この戦いで使われた矢が多く散らばっていたことに由来する地名とされています。

山城の遺構は南北に長い尾根の頂上部に築かれ、およそ南北９０ｍ、東西５０ｍの範囲に確認されています。北側の大きな堀切と中央部に設けられた土橋を渡ると、佐野鞍懸城最大の特徴である「石垣」にぶつかります。主郭では最大３ｍの高さを持つ高石垣となっています。地元の佐野地域で採れる自然石は薄く割れるので、レンガのように上手に積み重ねて高い石垣を築いています。これは在地石工の石積み技術を導入したものと思われます。一部石垣が崩壊している箇所も見受けられますが、これは人為的ないわゆる「破却」に関連するものとみられています。

戦国時代の城の多くは「土造り」であり、九州で総石垣の城郭が本格的に広がり始めるのは、１５８７年（天正１５）の豊臣秀吉による「九州攻め」以降と考えられています。佐野鞍懸城も、土造りであった中世の山城を石垣に造り替えたと思われますが、その時期や築城主体についてははっきりとは分かっていません。

改修される前に
作られた堀切

改修時に堀切を崩して、
築かれた石積み

●横矢掛り

●桝形虎口（ますがたこぐち）

●在地の積み方を
利用した石垣

0　100m

佐野鞍懸城縄張り図

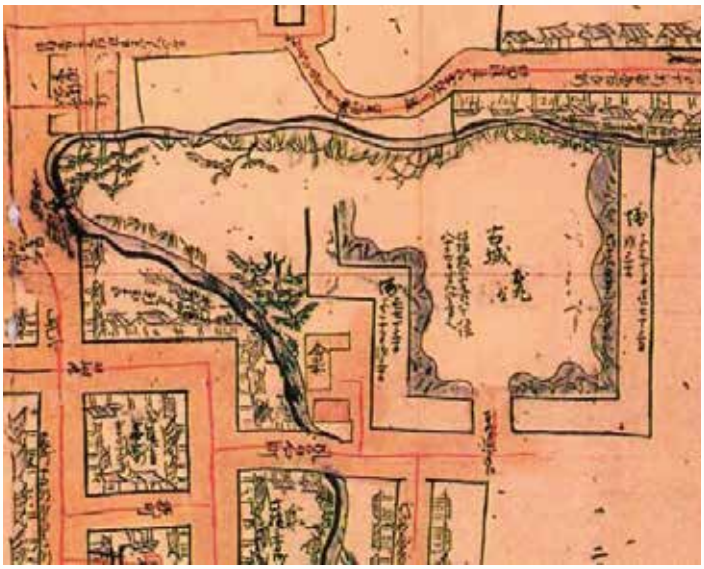
縄張り図は、大分県教委2004『大分の中世城館』総論編より一部加筆・修正

高田城　～高田氏居館から江戸時代の「陣屋」へ～

高田城は現在の桂陽（けいよう）小学校及び中央公民館を中心とした付近の、桂川右岸の台地上にあった城です。その始まりは、１１９６年（建久７）に大友氏の家臣とされる高田重定によって築かれたとされていますが、実際のところは不明です。以後、高田氏代々の居館であったと考えられますが、現在残っている城の遺構は、１５９３年（文禄２）に豊臣秀吉の命を受けて入城した竹中重利によって整備・拡張がなされたものです。

高田城は桂陽小学校北・東側にある「内堀」と、城台保育園辺りから高田高校の南側にかけて広がる「外堀」の二重の堀によって防衛ラインを形成していました。堀の幅は約１０ｍ前後、幅の広いところでは約２０ｍほどあります。また、堀をほった時に出る土を高く積み上げて「土塁（どるい）」と呼ばれる防御壁を作りました。高田城の土塁は、桂陽小学校の北側や、裁判所の裏側など一部良好に残っています。また、近辺には現在まで「本丸」「追手口」「城台」といった城館由来と思われる小地名が伝わっており、遺構とともに歴史を物語っています。

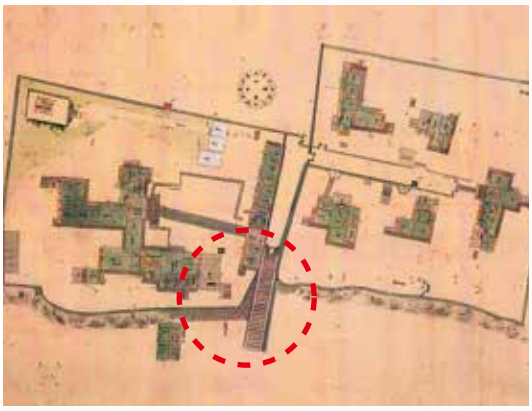
高田城は1661年（寛文元）頃に「破却」されたと考えられますが、1669年（寛文９）に高田が島原藩松平氏の領地となると、その支配のために高田城本丸跡に高田陣屋が築かれました。但し、島原藩は竹中氏が整備した高田城跡の一部しか利用しなかったため、堀や土塁といった中世城館の遺構がそのまま残ることになりました。江戸時代の記録には「ところどころに堀や池の跡がある」と伝えていて、一帯は田畑に変わっていたようです。当時の絵図（豊後国高田芝崎絵図）の中にも「古城」と表記されており、江戸時代の人々は、陣屋がある高台の辺りは、かつて城があっ



「豊後国高田芝崎絵図」(島原市本光寺蔵)
古城の記述や、堀、土塁のようすが描かれている

たということを明確に認識していました。また、中央公民館南東側にある石垣は、島原藩陣屋時代に造られたもので、江戸時代後期に高田陣屋を描いた絵図（豊後高田御陣屋幷六軒丁建前図）には、該当する石垣や石段が描き込まれています。

中央公民館（高田陣屋跡）南東側の石垣・石段



「豊後高田御陣屋幷六軒丁建前図」（島原市本光寺蔵）
中央公民館に残る石垣・石段が描かれている。

■竹中重利（1562～1615）：豊臣秀吉の軍師として活躍した竹中半兵衛のいとこ。高田へは大友氏改易後に1万石の石高で入りました。関ヶ原の戦いでは黒田官兵衛に誘われ、東軍につきました。戦後は豊後府内（大分市）に領地を与えられて移りました。

■島原藩松平氏：1669年（寛文9）から現在の長崎県島原市を中心に治めていた約7万石の大名。島原から遠く離れた豊後高田や宇佐などに「豊州領」と呼ばれる約3万石の領地がありました。豊州領支配の拠点として高田陣屋が置かれました。

■新発見！三ノ丸堀跡

2016年（平成28）7月、市道改良工事の際に、高田中学校南側敷地から幅約5m、深さ約3．5mの堀状の遺構が発見されました。中学校周辺は高田城三ノ丸の城域と推定されており、発見された遺構は当時の堀跡と考えられます。これによって、二ノ丸から東に張り出すように造られた三ノ丸の周りにも、堀が巡っていた可能性が高まりました。

高田城縄張り図

原図は豊後高田市発行都市計画図（２５００分の１）を使用。
縄張り図は２００６年・２００８年・２０１１年に福永が調査・作成。

北側に残る水堀跡
土塁を崩して
道路が走っている。
●大手口（予想図）
●本丸跡に残る
水堀
伝二ノ丸
●城台保育園
大分家庭裁判所
豊後高田出張所
●大手口南側の堀跡
伝三ノ丸
●豊後高田市立
高田中学校
●陣屋時代の石垣
●道路工事で見つかった
堀跡
0
200m

高田城跡から発掘された資料

２００３年（平成１５）に御所園（ごしょぞの）地区（伝・高田城二ノ丸）で行われた発掘調査では、以下の興味深い資料が発見されました。資料の時代は戦国時代～江戸時代頃で、竹中氏による高田城の拡張・整備の時期と前後します。これらの資料は高田城における人々の活動の痕跡を雄弁に物語っています。

（いずれも豊後高田市教育委員会 蔵）

「土師質土器」
盛付用の食器（坏）の底の部分です。素焼きの粗末な器ですが、日常的な食器などとして使われました。

「輸入陶磁器」
戦国時代の終わり頃、中国（明）で作られたものとされます。輸入陶磁器は大分県内各地の城跡でも出土していますが、他の器に比べて希少価値が高いため、武士たちが来客用や宴会用として特別に使用していました。

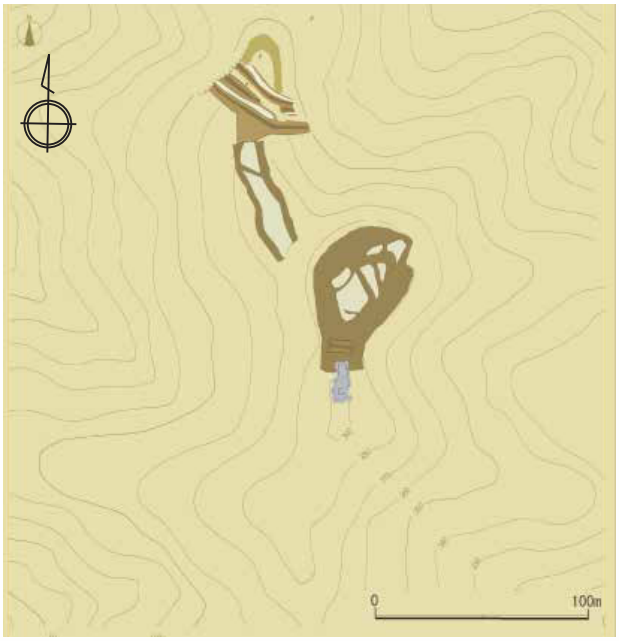
「（肥前系）陶磁器 染付」
肥前（現在の佐賀・長崎県）あたりで作られたと考えられる焼き物の器です。

「鉄砲玉か？」
火縄銃に使用された鉛製の鉄砲の玉と考えられます。現在の銃弾は、先の尖った形をしていますが、江戸時代までの鉄砲玉は丸い形をしていました。

奥畑鞍懸城　～もう一つの鞍懸城～

奥畑鞍懸城（おくばたくらかけじょう）は豊後高田市佐野奥畑の周防灘を北に望む標高約４００mの急峻な山上にある、比較的小規模な山城です。南北朝時代に六郷山寺院の一つである神宮寺を改造して造られたと伝えられ、戦国時代に佐野鞍懸城（５頁参照）に移ったといわれています。

城は山頂部にある曲輪群と、尾根筋の曲輪などで構成され、山頂から北西方向において、堀切が確認できます。

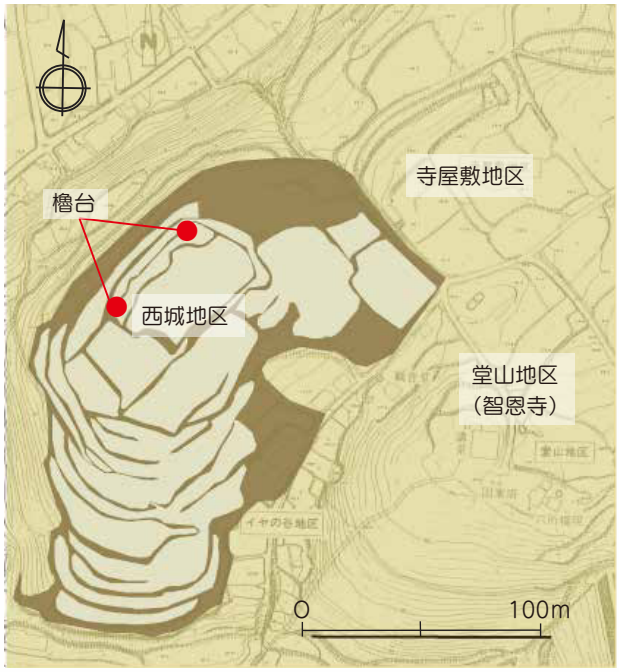


奥畑鞍懸城縄張り図

縄張り図は、大分県教委２００４『大分の中世城館』総論編より一部加筆

智恩寺西城　～智恩寺を守るための城～

智恩寺西城（ちおんじにしじょう）は豊後高田市鼎（かなえ）の丘陵上に立地し、その先端部には六郷山寺院の智恩寺があります。西城地区には櫓台状の突出部を持つ他、周辺部の埋没した堀や、寺屋敷地区でも堀と土塁が確認できることから、丘陵一帯が防御されるべき地域として認識されていたことが分かります。大友一族の小田原氏による城と考えられ、智恩寺の院主も鎌倉時代からすでに小田原氏が兼ねていました。



智恩寺西城縄張り図

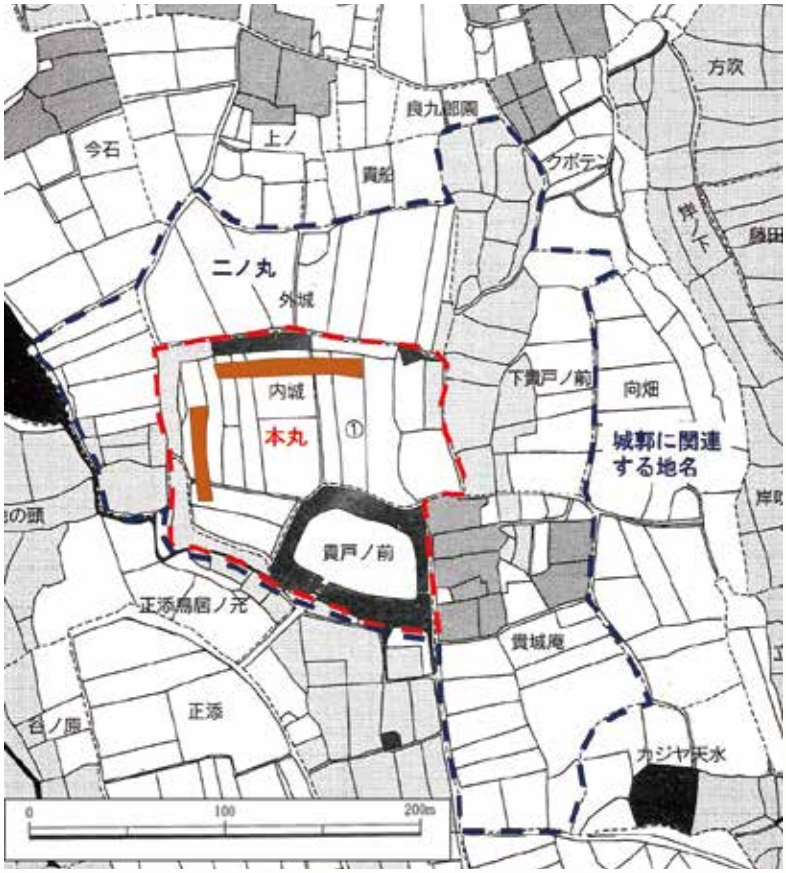
縄張り図は、大分県教委２００４『大分の中世城館』総論編より一部加筆

真玉氏居館跡　～木付系真玉氏の本拠～

豊後高田市西真玉にある真玉寺周辺が、かつての真玉氏居館跡でした。周防灘に向けてなだらかに延びてきた台地上の平坦な地形に築かれました。

真玉地域には鎌倉・室町時代初期まで、大神系真玉氏が真玉荘の地頭として長く活動していました。南北朝期以降、大友氏の家臣である木付系真玉氏が地頭として封じられると、旧来の大神系真玉氏と争った結果、ついに政権交代を勝ち取ります。現在に残る居館跡は、木付系真玉氏による支配拠点として構築されたものと考えられています。

堀の外側まで入れると、東西１４０ｍで南北１１０ｍ以上の館部分（≒本丸）が小字「内城」、その外側（≒二ノ丸）が小字「外城」という二重構造の館でした。内城には高さ１ｍほどの大型土塁がめぐる他、一部には水堀も残されていますが、多くは失われています。明治時代の字図を参考にすると、堀の形状に沿ったＬ字や細長い水田などの地割が確認できるため、居館跡の痕跡の手がかりを掴むことができます（右図参照）。また、近世になって現在の場所に移ってきた真玉寺の部分は、小字「貴戸（＝城戸）の前」であることから、ここが虎口として機能していたことも可能性として考えられています。



真玉氏居館跡周辺小字集成図

大分県教育委員会（2004）『大分県の中世城館 第四集』を一部改変

烏帽子岳城　～田染荘全体ににらみを利かせる～

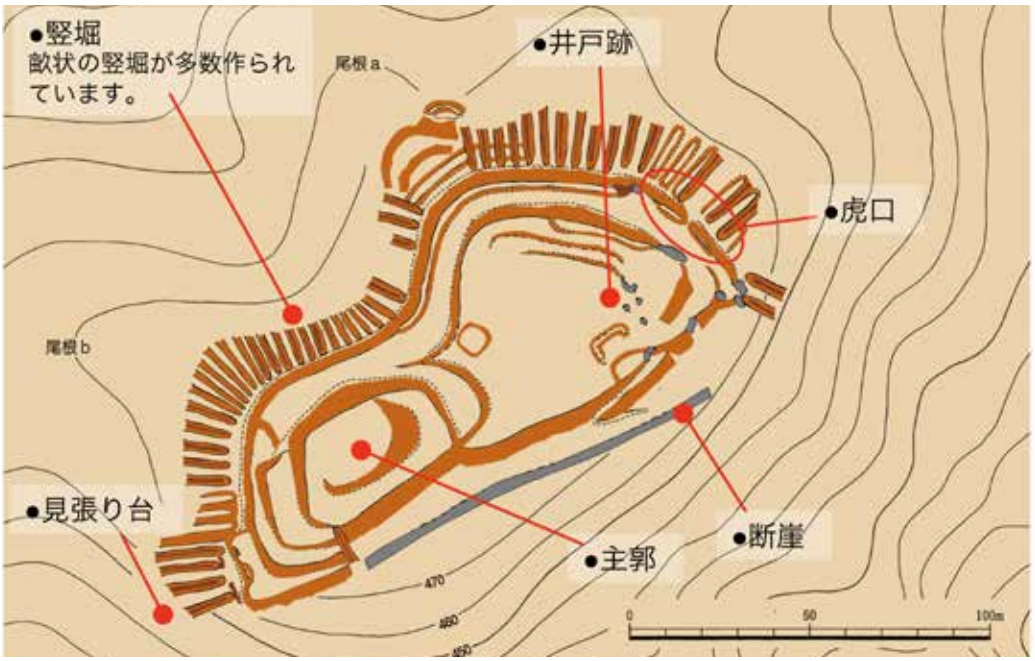
美しい農村景観で有名な田染荘小崎の南方に位置する烏帽子岳（標高４９３ｍ）は、田染地区を広く治めたとされる古庄氏の築いた中世城郭です。

烏帽子岳は、岩峰が連なる菊山・陽平地区の中にある独立峰で、城郭は南側の断崖絶壁を背にし、九州北部の中世城郭に特徴付けられる多数の畝状竪堀をめぐらせることで、堅固な縄張りとなっています。以前の調査では、竪堀は５４本もあり、これは県内でも屈指の規模です。また、周囲には多くの巨岩が点在しており、それらを城郭に利用していることも特徴であると言えます。

もう1つの特徴として、虎口から主郭にいたるまでの間に、細長い帯曲輪が作られており、通路として使われただけではなく、全体を横堀として使用したり、攻め手が一度に押し寄せることを防いだりと、多くの役割を果たしています。

現在は、植林等のため、山頂からの眺望は良くありませんが、近くの林道から北側を眺めると、田染荘のほぼ全域が一望できます。

烏帽子岳林道からの眺望（田染荘全域をのぞむ）



烏帽子岳城縄張り図

大分県教育委員会（2004）『大分県の中世城館 第四集』を一部改変

用　語　解　説

■**縄張り：**城の基本的な設計のこと。本丸や二ノ丸をどこに置くかとか、堀や土塁をどうめぐらせるかといった城全体の配置や組合せのこと。

■**曲輪（郭）：**土塁や堀、石垣などで分けられた城の一区画の名称。城の中心部に設けられたものを主郭（後の本丸）といいます。主郭を取り巻くように細長くめぐらされた曲輪を帯曲輪、腰曲輪と呼びます。

■**切岸：**敵の侵入を防ぐために、曲輪周囲を人工的に切り崩した急崖。

■**堀：**尾根を断ち切るように造られたものを「堀切」。山の斜面に沿って縦方向に掘られたものを「竪堀」。竪堀を連続して並べたものを「畝状竪堀群」といいます。いずれも敵の移動を阻む目的があります。山城は水を張らない空堀が主流です。

■**土塁：**曲輪や堀の周囲に土を盛ってつくった防御用の高まり。上から攻撃したり、矢などを防ぐために使用されました。

■**虎口：**城の出入口のこと。直線的に出入りするものから次第に防御を重視して、屈曲した出入口への変化が進みました。

■城跡見学の注意事項

○城跡は貴重な文化財ですから、大切にしましょう。
○一部を除き、城跡の多くは個人の所有地です。見学に際しては、立入に十分注意して、マナーを守って行動しましょう。
○ヘビやダニ、イノシシなど、害のある虫や植物などに気をつけましょう。
○山歩きの際は、動きやすい靴･服装で出かけ、地図やＧＰＳなどの準備もしておきましょう。

【参考文献】 大分県教育委員会（2004）『大分の中世城館 第四集 総論編』／大分県教育委員会（2003）『大分の中世城館 第三集 地名表･分布図編』／文化庁文化財部記念物課（2013）『発掘調査のてびき－各種遺跡調査編－』／豊後高田市（1998）『豊後高田市史 通史編』／豊後高田市（1996）『豊後高田市史 特論編－くにさきの世界 くらしと祈りの原風景－』／真玉町誌刊行会（1978）『真玉町誌』／鳥取市教育委員会（2016）『因幡の山城～攻防戦の跡をめぐる～』／岡山県古代吉備文化財センター（2015～2018）『攻略！おかやまの中世城館 第一巻～第四巻』
【図版提供･協力】 福永 素久氏（北部九州中近世城郭研究会）

ぶんごたかだ 文化財ライブラリー vol.1
『豊後高田の城跡』

発　行：豊後高田市教育委員会文化財室
〒872-1101 豊後高田市中真玉2144番地12
TEL：0978-53-5112 / FAX：0978-53-4731
E-mail：bunkazai@city.bungotakada.lg.jp
発行日：平成31年3月31日発行
印　刷：有限会社 宗印刷所　　表紙：佐野鞍懸城石垣